幡山地区・菱野

矢田川によって形成された沖積地で水田耕作を行う、農業を中心とする村落です。北側の丘陵内には、古瀬戸を焼き始めたころの窯跡が多く分布していました。

菱野城跡

矢田川の左岸で、南側からの台地が一部突き出たように接している「羽根屋敷」と呼ばれている地点が菱野城跡と伝えられています。村絵図では「林治郎左衛門古城跡」と記載され、菱野熊野社棟札（永正 14 年（1517）、天文 17 年（1548））にも菱野における有力者として名が挙がる（林次郎）左衛門（尉）雅光・林兵衛左衛門光利といった林氏の居城であったものと思われます。また林氏の前は、山口（上菱野）城の兄山田泰親とともに弟山田親氏が菱野城を拠点として山口・菱野のこの地域を治めたものと考えられます。

菱野郷倉（菱野郷倉文書・大般若経）

郷倉は年貢米の一時保存用の倉庫ですが、地区の共有文書なども保管されています。菱野郷倉には、江戸時代から近代にかけての文書類など 7,780 点が保管されています。享保 20 年（1735）の尾張藩が行った産物調査や、村役人（庄屋・組頭など）の給与、事務費、普請費用に関する文書があり、一括して瀬戸市の文化財（古文書）に指定されています。また、「版本　大般若経」は、熊野神社に隣接していた天台宗寺院の旧東福寺が所蔵していたもので、昭和 25 年（1950）に無住となり、廃寺となった際に郷倉に移管されたものです。菱野郷倉には 155 巻が現存しており、木箱 2 箱に収納されています。

菱野おでく警固祭り（市指定文化財 / 無形民俗・有形民俗）

菱野村の標（たし）具「おでく」は、小牧・長久手の戦いの武将梶田甚五郎を模した人形で、菱野村で落ち武者と間違えられて村人に殺された甚五郎の祟り払いとして馬に載せて猿投神社祭礼に参加したことが初まりといわれています。菱野村を含む近隣 10 か村の「山口合宿」で、菱野村は「おでく」を標具とするのが慣わしでした。山口合宿は大正 5 年（1916）を最後に行われなくなり、明治 14 年（1881）より始まった「郷社祭り」で各村から警固を出すようになります。特別な慶事にのみ開催されることとなったため、菱野のおでくも地区の祭りには出されなくなりました。しかし、現在は「おでく警固祭り」の伝承を保存するため、3 年に一度菱野熊野社におでくを奉納しています。

菱野熊野社

菱野熊野社は「十二所権現」とも称され、古くから菱野の氏神として祀られてきました。東福寺の僧が寺の守護神として熊野本宮の祭神の分霊を勧請し、この地に社を建立したとされています。東福寺の僧により祭祀が行われてきましたが、明治維新以後は神仏分離により東福寺の管理を離れ、村社としての社格を受け、今日に至っています。菱野郷蔵にはこの熊野社改修の際の棟札が保管されており、永正14年（1517）から昭和50年（1975）までの32点があります。最も古い永正14年銘の棟札では、「郷寶殿」が再建されたことや、「（林次郎）左衛門□雅光」と「浅井□□衛門尉」が菱野村の有力者であったことが分かります。

仙寿寺

福禄山 仙寿寺の創建等については、天文11年（1542）以前で寛文7年（1667）に臨済宗から曹洞宗雲興寺末寺に改宗されたとも、享保2年（1717）ともいわれます。本尊の木造聖観音坐像は鞘仏であり、その胎内にもう一体の聖観音を蔵しています。鞘仏は江戸時代の作であり、胎内仏は、高さ17.1 cm、ヒノキ材一木造で、大永2年（1522）銘と考えられる墨書があり、外面は漆箔を施しています。また、室町時代制作と考えられる釈迦十六善神図（伝明兆作）も伝えられ、春季と夏季に大祭が行われ、ご開帳されます。

菱野地区地図

❶菱野城跡（P146）
❷菱野郷倉（P147）
❸菱野熊野社（P149）
❹仙寿寺（P149）